

イ 算数・数学科の概要

80%以上の高い通過率を示す設問数が、学年が進むにつれて少なくなっている。  
 また、40%未満の低い通過率を示した設問は、小学校にはみられなかったが中学校では1割ほどあり、十分定着がなされていない内容があることが分かる。

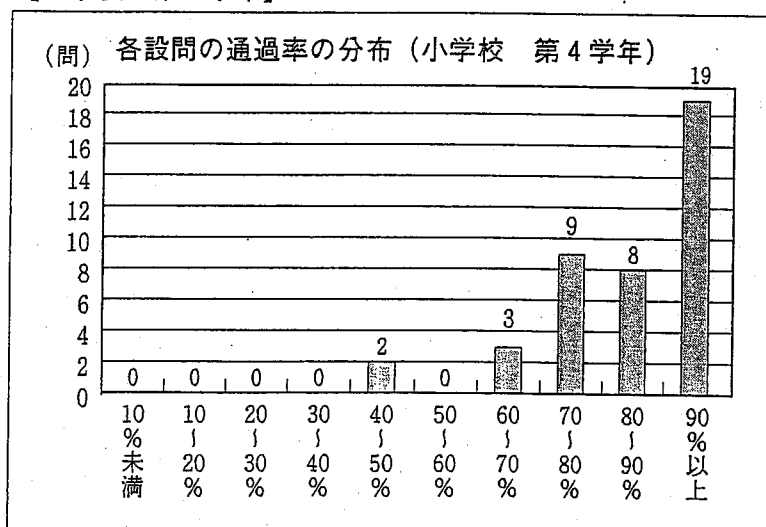
(ア) 各設問の通過率の分布 (学年比較)

(単位：問)

通過率の分布	算 数 学		
	小学校第4学年	小学校第6学年	中学校第3学年
90%以上	19	11	2
80%以上90%未満	8	13	10
70%以上80%未満	9	7	8
60%以上70%未満	3	1	6
50%以上60%未満	0	1	3
40%以上50%未満	2	3	5
30%以上40%未満	0	0	3
20%以上30%未満	0	0	1
10%以上20%未満	0	0	0
10%未満	0	0	0
設 問 総 数	41	36	38

(イ) 小学校第4学年の通過率の分布

【小学校 第4学年】



【考察】

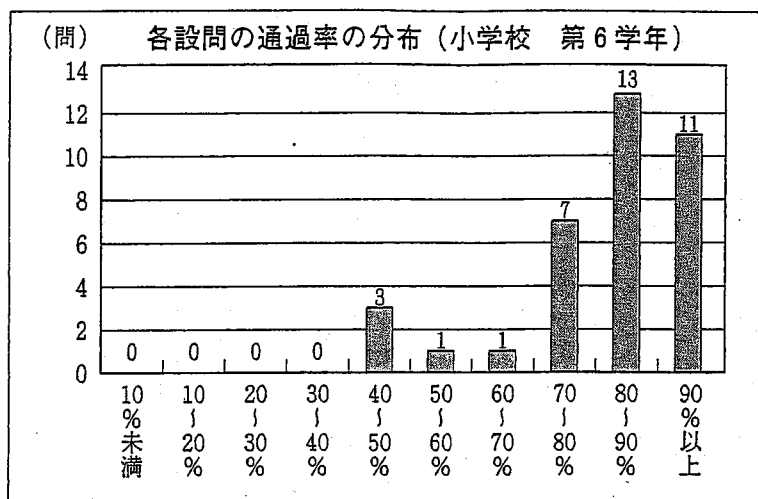
全設問数41問のうち半数近い19問が通過率90%を上回っており、70%を超える通過率を示す設問は全体の88%に当たることから、基礎・基本の定着は、おおむね図られていると考える。

しかし、通過率が低い設問を分析するとどの領域の設問も含まれていることから、特定の領域ではなく、各領域において

十分な定着が図られていない面があるのではないかと考えられる。例えば、「量と測定」領域の設問では、巻き尺の1目盛りが何cmを表すか、はかりの1目盛りが何gを表すかが理解できずに、特に低い通過率となったことが予想されるなど、今後、どの学習内容において定着が不足しているのかを細かく調査し、指導の重点化を図る必要があると考える。

(ウ) 小学校第6学年の通過率の分布

【小学校 第6学年】



【考察】

通過率が80%を超える問題が全設問数のほぼ7割を占め、通過率の70%を超える設問数は86%に当たる。

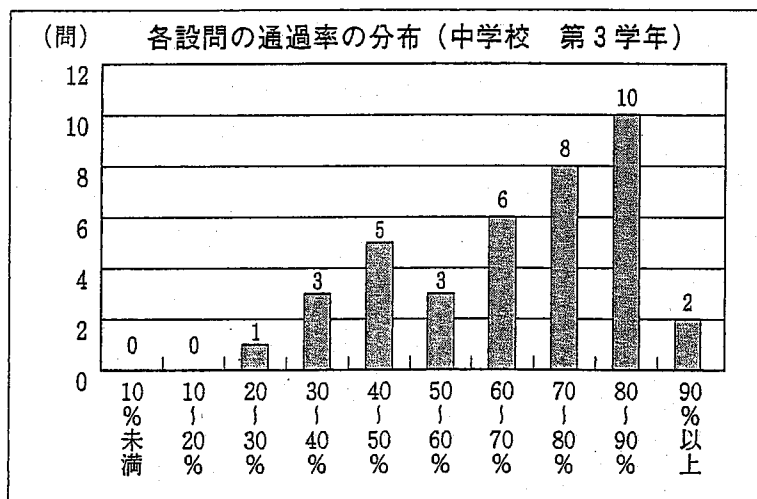
このことから、基礎・基本の定着は、おおむね良好であると考えられる。

しかし、通過率が50%に満たない問題も約1割あり、誤答傾向を分析し、指導方法の工夫・改善を

図っていく必要がある。今回の調査では、特に分数を小数に表したりすることや小数の乗法をどのような場面で活用することができるかを問う設問、もとにする量と割合から比べられる量の大きさを求める設問等の通過率が低いことが明らかになっており、今後の指導方法改善が求められる。

(エ) 中学校第3学年の通過率の分布

【中学校 第3学年】



【考察】

小学校と比べると90%以上の高い通過率を示す設問数が少ないが、全体の38問中20問は70%以上の通過率であった。

しかし、通過率が50%に満たない設問数も9問で24%を占めており、今後の指導方法改善が求められる。

具体的には、40%から49%の通過率の設問は、

「1次関数」「確率」であり、40%以下の通過率の設問は、「1次関数の交点」「三角形の合同条件」「二等辺三角形の決定条件」「直線と平面の垂直関係」であった。

これらの設問は、いずれも「数と式」以外の領域の設問であり、特に学年後半で取り扱う場合が多い「数量関係」の定着が不十分であることがうかがえる。また、「図形」については、論証、立体の構成等に関連する設問の通過率が低く、今後の指導方法改善が必要である。